

『すくりんとん』

作・kuwanisi 劇場脚本部

登場人物

加藤
湯野
安田

マンガ研究同好会部室
舞台上には、机が4個
奥には、入り口のようなマンガの枠
湯野、小走りで部室に入ってきて、自分の机
に鞆をおく
続いて、安田が入ってきて、自分の机に鞆を
置いて、トイレに行く
続いて加藤が、登場して、

加藤 大変だ、大変だ。
湯野 どうした、美咲。
加藤 大変、大変、湯野。
湯野 どうした、どうした、美咲。
加藤 ちよつと、待って、ちよつと、落ち着かせて。
湯野 何々、美咲。
加藤 ちよつと、まって、深呼吸させて。
湯野 この封筒、何？真っ黄色じゃん、
加藤 だから、待って、
湯野 何を？
加藤 藍は？
湯野 トイレ。
加藤 そうか、じゃあ、ちよつと待ってようか。
湯野 うん。

何もない時間

湯野
加藤

そんなに、大変なことなの？
それが、

安田、小走りで手を拭きながら入ってくる

安田

大変、大変。

湯野

どうした、藍。

安田

私さ、ここ1週間ぐらい便秘でさ。ピンクの小粒
コーラックを飲んでる訳ですよ。

湯野

うんうん。

安田

そしたらさ、今日、今、こんなん。

湯野

まじで。

加藤

ちよっと、

安田

あれ、ほら、あの、博物館の、

湯野

何？

安田

ゾウ、ゾウ、ほら、あの

湯野

ゾウ？

安田

そう、新しく発掘された、ほら、

加藤

ミエゾウ。

安田

そうそう、ミエゾウ。

湯野

ミエゾウがどうかしたの？

安田

ミエゾウのフンぐらいだった。

湯野

なるほど。

安田

いやあ、流すの大変だった。

湯野

それは、大変だったね。

間

加藤

私も、今、すごい大変なことを職員室で、リンダ
に聞いてきたんだけど、

湯野

そういうば、大変、大変って騒いでたね。

加藤

そう、すごい大変なことさ、湯野が、聞きたが
ってたけどさ、

湯野

聞きたかった。

加藤

でも、藍が来てからの方が良いと思って、待つて
ただけど、

湯野

待つてた、待つてた。

加藤

そしたら、新しい大変な話がやってきて、私の大
変な話と、藍の大変な話がまじっちゃって、最終
的に私の大変な話は、うんこに負けてしまったつ

湯野　　　　というのが無性に腹が立つ！
加藤　　　　そうだね、うんこに負けたね。
あーーーーー、

加藤、外にダッシュ

加藤　　　（外で）なんや、このプリント。2年8組田中つ

て、誰やねん！あほか！うおつ、あぶねつ、虫！
デカ！カメムシ多すぎ！うわつ、あぶね、お茶こ
ぼれとるし。誰、もう！

この封筒？

（戻ってきて）触るな！

何？

そこには、私たちの夢と希望が詰まってるんだよ。
私たち？

そう、お前はうんこが詰まってるかもしれないけ
どな、私の夢と希望が詰まってるんだよ！
うまいな。

もう、出たから、詰まってるけどね。

うっさい、ボケ！

ひどい！

ボケはないわ。

「私はボケでした」と反省したくなるような、そ
んな話だよ。

そんなに大変な話なの？

だって、夢と希望だから。

夢と希望。

そう、ドリーム　アンド、・・・・・・、ドリーム
アンド、

加藤、紙の辞書で調べ始める

ホープ。

ホープだ、ホープ。ドリーム　アンド　ホープだ。

ドリホー。

バカにすんな！

大丈夫か、国公立大学希望！

ど忘れだ、ど忘れ。あんまりにも簡単だからさ。

で、封筒は？

聞いて驚け。

加藤　　　湯野
加藤　　　湯野
安田　　　加藤
加藤　　　安田

湯野　　　湯野
安田　　　湯野
加藤　　　湯野
加藤　　　安田
加藤　　　安田

湯野　　　湯野
加藤　　　湯野
安田　　　加藤
安田　　　加藤

安・湯
加藤
湯野
加藤
えー……。
(ぐすん)
ごめん、サザエ。
もう！

加藤、湯野を外に追い出す

湯野
安田
加藤
湯野
(外で) なんや、このプリント。2年8組田中つて、誰やねん！あほか！うおつ、あぶねつ、虫！デカ！カメモシ多すぎ！話が前に進んでませんよ。だからね、夢と希望が、
(外から) えー……。、

湯野、戻ってくる

湯野
安田
加藤
安田
お茶、こぼれとったし。ふんでまったし。いいから、先。座って。
うん。

加藤
安・湯
加藤
安・湯
加藤
安・湯
(封筒を見て) 宛先、三重県立桑名西高校マンガ研究同好会、御中！
ウオンチュウ！
差出人、全日本マンガ能力研究協議会。
オールジャパン！
内容、
(ごくつ)

加藤、CDデッキを取り出し、封筒を開けて、
中の紙を出す。

加藤
安・湯
第1回全国高等学校、マンガ甲子園について！
マンガ甲子園！

3人、ダンスを踊る
最後の決めポーズをするが、4人での構成なのかうまく決まらない

加藤
湯野
やっぱり、マリリン、いないと決まらないね。そうだね。

安田

長いね、休み。

湯野

もう、休みって感じじゃないでしょ。

安田

まあ、そうなんだけど。

湯野

誰か、連絡してるの？

加藤

してない。

安田

私も。

湯野

あら。

加藤

最初はさ、ちゃんとしてたよ。「大丈夫？」とか。

安田

私も。

湯野

私、「お前、何休んどのじゃ！」ってずっと送信してた。

加藤

こら！

湯野

でも、マリリン、携帯見ないしね。

安田

ガラケーだし。

湯野

私もガラケーだから。

安田

そういう意味じゃなくて、

湯野

どういう意味？

加藤

誰も、湯野のことを「ゾウガメ」なんて呼ばないから。

湯野

ほんとに、どういう意味？

安田

さあ。

加藤

だから、ガラパゴスはね、スペイン語で「ゾウガメ」っていう意味だから、

湯野

もう、わかった、わかった、美咲が頭が賢いのはわかったから。

加藤

何、その言い方！

湯野

いいの、私も大学行ったら、スマホに変えるから。

加藤

えっ、湯野大学行くの？

湯野

何、その「お前の頭じゃ行けないだろ」的な言い方は？

加藤

いやいや、そうなんだけど、

安田

美咲、

加藤

声優は？

湯野

うん、まあね、ほんととは専門学校に行こうと思ってたんだけどさ、なんか色々あってさ、

安田

何、色々って、

湯野

まあ、いいじゃない。で、美咲、内容は？

加藤

ええとね、

封筒の中から、紙を取り出し、

加藤

ええとね、

加藤、CDデッキを取り出し、

湯野

またあ？

加藤、封筒の中から、さらに封筒を取り出し、

加藤

第1回全国高等学校マンガ甲子園課題テーマ在中。

安・湯

ザイチュウ！

3人、ダンスを踊る

やはり最後の決めポーズが決まらない

だから、マリリン、いないと決まらないんだって。

学校、来ないもんね。

でも、リンダの所には、連絡がちよくちよくくるみたい。

なんで？リンダ、担任じゃないじゃん。

まあ、うちの顧問だからでしょ。

そうだけど、それだったらヤマちゃんの立場ないじゃん。

絶対、ヤマちゃんのクラスの方が良いよね。

ヤマちゃん、若いからね。

若い方が良いでしょ。

うん。

うちのマツコなんか、最悪だよ。全然動かないんだって。

まあね。

この前なんか、車から職員室まで、荷物運ばされたよ。

安田

うちのザビエルも、話すの遅いからさ、SHR、なかなか終わらないだって。おかげで、トイレにも行けないの。1時間目とか地獄だよ。

先に行つとけよ。

無理なんだって、バスつくのギリギリなんだから。

でもまあ、美咲の所のリンダが一番良いのかもね。

うん、良い先生だと思うけどね。

だから、マリリンも連絡してくるんだからね。

最近はないらしい。

加藤

湯野
加藤

そうなんだ？
だから、あんた達の所に連絡ないのかって、

間

3人

電池、切れたのかな。

同時に、同じ事を言ってびっくりする

加藤

よし、テーマを確認しよう。

湯野

そうだね。

安田

うん。

加藤

開けるよ。

安田

お願いします。

加藤

ドウルドウルドウルドウル（ドラムロール）

安田

早く、

加藤

ジャン、記念すべき第1回大会の予選テーマは、

安田

テーマは？

加藤

「本音」

湯野

本音？

加藤

本音をテーマに、B4サイズのマンガを完成させ

なさい。

安田

本音か。

加藤

難しいね。

安田

要は、腹を割って話そうぜ！とかでしょ。

加藤

腹を割るっていったってね、

安田

いつの時代だよって感じだよね。

加藤

腹を、割って話すでごわす。

安田

そうぜよ、腹を割って話すぜよ。

加藤・安田、何かを期待する目で湯野を見る

湯野

もう、いいから。

安田

やってよ、桂小五郎。

加藤

薩長同盟。

湯野

あのさ、そんなことより、ちよつと気になること

があるんだけど、

加藤

何？

湯野

最初に入場行進とか言ってなかった？

加藤

言ったよ。

湯野 何、それ。
安田 入場行進でしょ。
加藤 うん。
湯野 なんで？
加藤 だって、甲子園だから。
安田 甲子園だからね。
湯野 そういうものなの？
加藤 多分。
安田 うん。
湯野 そうか、甲子園だから、行進か。
安田 何々、湯野は、何が引っかけてるの？
湯野 行進。
加藤 えっ、湯野は、行進するのがいやなわけ。
湯野 そういう訳じゃないけど、なんで漫画描いて、行進するのかが疑問。
安田 確かに。
湯野 全く関係ないじゃない。漫画と行進。
安田 確かに、一番両極にある感じだもんね。
加藤 そうかな。
湯野 じゃあ、美咲は、笑いながら行進できるの？
加藤 できるよ。
湯野 やってよ。
加藤 ここで？
湯野 うん。
安田 確かに、実験してみないとわかんないよね。
加藤 実験？
湯野 やってみてよ。
加藤 じゃあ、

加藤、行進の準備をするが始まらない。

安田 どうした？美咲。
加藤 うん、なんか、
湯野 ほら、なんか抵抗あるでしょ。
加藤 いや、できるよ。できるんだけど、何か足りない気がするんだよね。
安田 何？
加藤 わからない。気持ちの問題なのかもしれないけど、ひよっとして、行進曲じゃない？
加藤 そうかも。

安田

じゃあさ、「恋するフォーチュンクッキー」でも流しとく？

加藤

えー、

安田

何？

湯野

高校球児か！

安田

だって、

湯野

やっぱりさ、高校ペン児としては、アニソンなんじゃないの。

加藤

確かに。

安田

「タッチ」とか？

湯野

カキーン！野球から離れようよ。

加藤

うん。高校球児から離れよう。

湯野

思い切って、ロボットなんてどう？

安田

ロボット？

加藤

確かに、文化系っぽい。

湯野

しかも、理系女っぽいから、知的でもある。

安田

確かに。

加藤

なんか、いいのある？

湯野

任しといて。

加藤

はやく、はやく、私のやる気があるうちに。

湯野

はいはい。じゃあ、いくよ。

加藤

よし、こい！

湯野

（ナレーション風）それでは、三重県代表桑名西高校の入場です。

安田、いつの間にかプラカードのようなモノ

を持って前を歩く。

加藤、満面の笑顔で歩く。

あーーーーーー、（倒れる）

美咲！

無理だ。

でしょ。

え、楽しかったけど、

藍、プラカード持ってたつもりかもしれないけど、

あれだとラウンドガールだから。

えっ、

そうだよ、藍。あれだと、ハイレグ着て歩く人になっちゃうよ。

そんなに自信は無いんだけどな。

安田

加藤

安田

湯野

安田

湯野

加藤

湯野

加藤

湯野
安田

何の？

いや、ラウンドガールにはちよつとなれないんだ
けど、

うんうん、なれてないよ。

そうそう、だから、なれないよ。

藍、誰もラウンドガールをしろと言っているわけ
ではなくて、

だから、なれないよって。

藍、ラウンドガールには、

なれないって言ってるでしょ！

なんで怒るわけ？

だって、美咲が、私のことをラウンドガールじゃ
ないって言うから、

ラウンドガールじゃないでしょ、

だから、ラウンドガールじゃないけど、ラウンド
ガールにはなれないって事を、

なりたいの、ラウンドガールに。

なりたくないよ！

だから、なんで怒るわけ？

ダメだ、なんか、ダメだ。

ほら、こんな空気になっちゃったのも行進のせい
じゃん。

そうか？

そうだよ。

なんで、湯野はさ、そんなに行進がいやなわけ？
なんでって、

1回、やってみたら？

えっ、

私もさ、がんばるから。

何を？

はい、いくよ。

ちよつと、

（ナレーション風）それでは、三重県代表桑名西
高校の入場です。

安田、あきらかにラウンドガールで腰をくね
くねさせる

湯野、やけくその顔で歩く。

湯野

あーーーーー、（倒れる）

湯野

私は、殺し返すけどね。

加藤

殺されて、殺し返す訳？

湯野

そして、みんな、いなくなっていくのです。

安田

マリリンは、殺さないよ。

加藤

なんで？

安田

なんかなんだっけな、なんかいるんだって、心に。

湯野

はっ、

加藤

大丈夫？ 藍。

安田

だから、なんか、心の中にいるんだって、妖精みたいなのが、

湯野

妖精？ あっ、なんか、言ってたね。

加藤

そうそう、言ってた、言ってた。なんだっけ？ 時計のやつでしょ。

安田

そう、時計の、絵本だよ、なんだっけ？

湯野

なんか、マリリンっぽいね。

加藤

何が？

湯野

こう、出そうで出ないというか、

加藤

そうだね。

安田

なんか、こうやって、マリリンのことも忘れていくのかな。

間

湯野

忘れないでしょ。

加藤

うん、そう簡単に、人のことは忘れないでしょ。

安田

そうだね。

それぞれの机に向かい、自分の時間を過ごす

安田

どうする、マンガ甲子園？

湯野

やるでしょ。

加藤

うん。

暗転

別の日

湯野、必死に机に向かっている

加藤

大変だ、大変だ。

湯野 どうした、美咲。
加藤 大変、大変、湯野。
湯野 どうした、どうした、美咲。
加藤 締め切り、締め切り。
湯野 マンガ甲子園の？
加藤 違う、違う。進路希望調査。
湯野 美咲もか！
加藤 じゃあ、湯野も。
湯野 もう一人いるよ。

安田、小走りで手を拭きながら入ってくる

安田 大変、大変。
加藤 藍も、お悩み中？
安田 悩みすぎて、またうんこ出なくなった。
加藤 藍！
安田 しょうがないでしょ、女の子なんだから。
加藤 それはそうなんだけど。
湯野 進路か。
加藤 湯野は？声優どうするの？
湯野 声優、なりたいけどね、才能ないしさ。
安田 そんなことないよ。
湯野 かわいくもないしさ。
加藤 そうだね。
湯野 おい！
安田 じゃあさ、才能とかawaiiさ、どっちとる？
湯野 はっ、
安田 だから、神様が、どっちかをあげようって言った
ら、どっちほしい？

間

湯野 (神様っぽく) お前に、才能か、かわいさかどち
加藤 らかをやろう。
湯野 神様！
加藤 さあ、どっち？
湯野 難しい。かわいさだけだと、なんか、男にちやほ
やされるだけのバカな女になってしまいそうな
気がする。
湯野 じゃあ、才能かい？

加藤
安田

湯野
安田

湯野

加藤

湯野

加藤

湯野

加藤

湯野

安田

湯野

安田

湯野

加藤

安田

加藤

湯野

加藤

湯野

加藤

湯野

安田

加藤

湯野

加藤

湯野

安田

湯野

安田

いや、その才能にうぬぼれ、誰にも相手にされないブスな女になってしまいそうな気がする。でもさ才能があった方がいいよ。なんかさ、かわいい女はいっぱいいるけど、才能ある女ってあんまりいないじゃん。才能ある人ってさ、たいしてかわいくない人でも、なんか、かわいく見えてくるような、そういう扱い方されてるじゃん。ちよつと、すごいこと言ってるよ、藍。

そうかな。

まあ、私は、才能なくて、かわいくもないけどね。

湯野は、きちんとすれば、きれいだよ。

何、きちんとすればって？

いや、きちんとすれば。

じゃあ、私は、かわいくなくてもいいから、きちんとしない。

そういう所だと思う。

ちよつと、ちよつと。

（唐突に）マリリンって、進路希望、提出したのかな。

知らん。

気になるよね。

でも、まあ、学校に来ない訳だからね。

保育士だっけ？

確か。

子供にかわいい絵、書いてあげたいからって言うてたな、確か。

言ってたね。

なんで来ないのかね！

わかんないよ。

リンダとか知ってるんじゃない。

多分ね。

ヤマちゃんも大変だよな。

マリリンの家とか行ってるのかな。

そりゃ行くでしょ。ヤマちゃんだもん。

あら、

何？

まあいいけど。

なんか、あったのかな。

マリリン。

うん。

湯野

当たり前でしょ。あったから、来れないんですよ。何にもなくて、休むような、マリリンじゃないでしょ。

安田

そうなんだけど、何？

加藤

なんかこの前、マリリンの心の話になったじゃん。

湯野

心？

安田

そう、絵本の。

加藤

ああ、あったね。

安田

あれ、気になってさ、調べたんだけど。

湯野

調べたの？

安田

なんか、気になって。

加藤

で、うん、聞く？

安田

聞くけど。

加藤

うん。

湯野

「すくりんとん」って絵本。

安田

あっ！そうそう、すくりんとんだ。

湯野

なんか、思い出してきた。

加藤

で、すくりんとんっていう妖精が、

安田

待って、待って。思い出すから。

湯野

あれだ、すくりんとんっていう妖精がいて、心の

加藤

中に。

安田

うん。

加藤

待って、思い出すから。

湯野

確か、判別するんだよね。こう、自分の気持ちと

加藤

いうか、感情だっけ？

湯野

だから、待ってって。

加藤

わかったよ。

間

安田

思い出した？

加藤

ごめん、無理。

湯野

ほら、

加藤

ごめん。

安田

もっと、覚えなきゃいけないことが多いんだから。

加藤

何、それ？

安田

英単語とか、公式とか覚えなないと。

湯野

国立大学、行くんだもんね。

加藤
安田

目指してるけど。
続き、聞く？
聞くけど。

湯野
安田

うん。
でね、すくりんとんは、私たちの心の中にたまつた感情を、わけてくれるの。

加藤

わかる？

安田
湯野

これは、良い感情だ。これは、悪い感情だって。そうそう。

安田

で、良い感情は心の中に解放して、悪い感情は、大きな時計の中に閉じ込めちゃうの。

湯野
安田

時計金庫みたいな。
時計の中で、時間が経つにつれ、少しずつなくなっていくんだって。

加藤

ふーん、良い話だね。

湯野
加藤

1回、聞いている話だよ。
うるさい！

安田
湯野

だけど、時計の中にずっと残ってるやつもいて、悪い感情のボスみたいな奴だな。

安田

それは、時計の中で、人生と一緒に過ごしていくんだって。

加藤
湯野

ふーん、奥が深いね。
1回、聞いているけどね。

加藤
安田

もういいって。
で、ちよつとずちよつとずつ、時間をかけてすくりんとんが細かくして行って、なくしていくんだって。

湯野

あれだな、あの、ダンスとかをさ、ゴミとして出すとお金取られるから、袋の中に入れて、燃やせるゴミとして出したいから、もう、バキバキに壊して、燃やせるごみの袋の中に入れてさ、袋が破けないようにさ、

加藤

やったことあるの？

湯野
安田

うん、大変やった。
そうやって、ちよつとずつだけど、自分の時計も進んでいくんだって。

加藤

ふーん。

安田
湯野

なんか最近さ、いっぱい事件が起きてるじゃない。まあね、

安田

高校生の事件もいっぱいじゃん。

加藤
安田

多いね。
もう、高校生なのに、時計の中いっぱい残って、もう入らなくなるぐらいいっぱい、すくりんとんも、いやなんだろうなって、思っちゃって。多分、もう、時計も進んでないんだろうなって。

間

安田

マリリンのすくりんとんも、いやになったから、時計止まっちゃったのかな。

間

加藤

マリリントンめ。

安田

えっ、

加藤

マリリンのすくりんとんだから、マリリントン。

安田

なんか、ごめん、豚みたいな、そういう絵が出てきた。

加藤

マリリンに失礼だぞ！

安田

違う違う、でも・・・、豚だった。

間

湯野

気づけなかったね。

安田

えっ、

湯野

そういうことでしょ、藍が言いたいことは。

安田

うん。

加藤

気づけなかったか。

安田

気づけなかった。

加藤

でも、自分から言わないと。

湯野

ん？

加藤

いっぱいになって、時計が進まなくなったらさ、言わないと。

安田

そうだね、それで、もう1回、時計進めないとね。

湯野

すくりんとんに働いてもらわないと、

加藤

ひよっとして、それを、「本音」っていうのかもね。

加藤

何、突然。

湯野

マンガ甲子園。

加藤

ああ！

湯野

ちよっと、考えてたんだけど、「本音」

安田
湯野

そうかも。

本音ってさ、本当の音って書くじゃない。でも、そんな音は聞こえない訳で。ひよっとして、時計の中で、すくりんとんが一生懸命崩してくれてる音が、本音なのかもね。

加藤

本音か、

湯野

難しいな！マンガ甲子園。

安田

そうだね、

湯野

これをどうしろっていうんだ！

加藤

わからん。

安田

うん。

加藤

でも、私も、いっぱいかも。

安田

美咲、

加藤

私のすくりんとんも、ストライキかも。

湯野

デメリントン。

加藤

何、それ。

湯野

目がでかいから。

加藤

おい！

湯野

まあでも、実際そうだね。私も結構、いっぱい

安田

かも。マリリンのこと、笑えないかも。

安田

そうかもね。

間

進路希望調査をみつめ、自分の意思を書き、
提出しに行く

それぞれが、それぞれの時間で帰ってくる

湯野

むかつく！マツコ！

加藤

こらこら、湯野。担任の先生に向かって、マツコ

はいかん。

安田

いなくなれり、ザビエル！

加藤

こらこら、藍。担任の先生に向かって、ザビエル

湯野

はいかん。

加藤

美咲のこのリンダはいいよ。

湯・安

うん。「がんばって、ヘイ！」って言われた。

加藤

ヘイ！

湯野

うん、ヘイ！

そりゃさ、美咲は、国公立大学を目指しているわけですから、

湯野 加藤

湯野

加藤

湯野

安田

湯野

安田

加藤

安田

加藤

安田

湯野

加藤

安田

湯野

安田

湯野

加藤

湯野

加藤

でもさ、

安田

加藤

安田

加藤

湯野

安田

湯野

加藤

安田

加藤

安田

加藤

湯野

安田

加藤

湯野

加藤

安田

湯野

安田

湯野

加藤

安田

加藤

湯野

安田

湯野

安田

湯野

加藤

安田

湯野

加藤

湯野

安田

湯野

加藤

湯野

加藤

湯野

加藤

湯野

安田

加藤

えっ？

この生徒、殺してやりたいとか思うんだろうね。

マツコはすぐ、「お前は1回死ね」って言うけどね。

それもどうかと思うけど、

私たちより、長く生きてる分、すくりんとんが、

時計の中にしまってる感情の量も多いよね。

悪い感情？

うん、だから、残ってるボスキャラ的な感情も多いんだろうな。

うん。

大変だな、デブリントン。

えっ、

マツコのデブリントン、絶対大変だよ。

大変そうだよ。

確かに。

リンダのヘリントンは、そうでもなさそうだね。

そんなことないと思うよ。いろいろあるでしょ、

多分。

ザビエルのハゲリントンは、

そうなると思ったけど、

駄目、ハゲリントン。

ダメじゃないけど、直接すぎるよ。

湯野の、デブリントンもかなり直球だよ。

そうだね。

大変だな、大人！

ヤマちゃんも、大変だよ。

間

ヤマリントン。

普通だね。

だって特徴ないんだもん。

イケメリントンとか、

イケメンかり、若いだけじゃん。

うっさい、モシヤリントン。

なんだ、このやろ！

そのモシヤモシヤな毛を何とかしろ！

好きでモシヤモシヤじゃない！

ちよっと、

なんだ、シリリントン。

安田
湯野
安田
加藤

安田
湯野
加藤
湯野

加藤
安田
加藤
湯野
加藤
湯野
安田
湯野
加藤
湯野

湯野
安田
湯野
加藤
湯野
加藤
湯野
加藤

え、

その尻で、何人の男をだましているんだ。

そんな、

シリリントンよりは、デメリントンのがかわいい
ような気がする。

そんなことない！

なんか、3匹の絵がうかんだわ。

何が、

デメリントンとモシヤリントンとシリリントンが
むきよむきよ言って、お互いの本音、聞かせてる
のが。

むきよむきよって。

なんか、ちよつとかわいいね。
確かに。

これ、いいんじゃない。

何が。

マンガ甲子園。

あつ、

デメとモシヤとシリがさ、一生懸命働きながら、
時計進めながら、話してるの。

いいね。

うん。

なんか、描けそうな気がする。

間

モシヤリントンは、私の感情をどうやって判断し
てくれたんだろう。

何？

私が「声優になりたい」って感情は、「良い感情」
にいらてくれたのかな。

・・・。

ひよつとして、「悪い感情」に入れられて、今も必
死に、細かくしてるのかな。だから、私は、どう
でもいいやって思ってたきちやってるのかな。

どうでもいいの？

よくないよ。

声優になるんじゃないの？

なるよ。

じゃあ、

湯野　でも、まわりはさ、誰も「うん」って言ってくれないし。

安田　まわりって、
湯野　なんでなりたいのって言われてもさ、「なりたから」しか言えなくて。

安田　湯野。
湯野　ほんととほさ、美咲も藍も、私のこと、バカにしてるんじゃないかって思ってるんだよね。

安田　してな、
加藤　してる。

安田　美咲、
湯野　どうせ、声優なんて、お前にはなれないって、
加藤　思ってるじゃない！
安田　ちよつと、

加藤　声優になろうとして専門学校に行こうとしていた湯野はバカにしていた。でも声優になれないなんて思ってた。湯野ならなれると思ってた。それから、マツコのことを信頼して大学に行くことを決心して、がんばって勉強していた湯野は、尊敬してる。逃げなかったから。

湯野　美咲。

湯野　多分、モシヤリントン、めっちゃがんばってると思う。そういう感情、こそいでこそいで、声優になりたいっていう感情だけを残して。がんばって削ってると思う。

加藤　・・・・・・

湯野　その音、ちよつと聞こえるもん。
加藤　どんな音？

間

加藤　モシヤモシヤ！

間

安田　最悪だ。

湯野　うん、なんか、つらい。

加藤　うっさい！

安田　結構、良い話だったよね。

湯野　ちよつと、泣きそうになってたもん。

安田

モシヤモシヤ。

湯野

もうちよつと、あるでしょう。

安田

大丈夫か、国公立大学希望。

湯野

がんばれ、デメリントン。

加藤

大丈夫だし、がんばるし。

湯野

ありがと。なんか、すっきりした。

加藤

どういたしまして。

湯野

よし、がんばるわ、私。デメリントンに迷惑はかけれないから。

加藤

何、それ。

湯野

なんかさ、デメリントン頼んでもないのに、こつ

加藤

ちの仕事、手出しそうだもん。

安田

そんなことないわ。

湯野

私のさ、シリリントンは？

安田

隣で、じつと見てそう。

湯野

どういうこと？

加藤

何にもしないけど、私ここにいるから。あなた達、

安田

がんばってって。

加藤

そんなことないよ。

安田

ある。

湯野

ちよつと、

安田

よし、これで行こう！

湯野

何が、

加藤

マンガ甲子園。

湯野

ああ。

加藤

絶対忘れてたでしょ。

湯野

そんなことないよ。

加藤

なんか、こうさ、大きい悪い感情の固まりみたい

湯野

なのがあつて、真ん中に時計があつて。

加藤

うん。

湯野

それは、みんなの時計で。私たちの時計で、それ

安田

を動かすために一生懸命３人で削ってるの。

加藤

なんか、モシヤリントン、文句ばっか言って働い

湯野

て、

安田

そうか、

加藤

それを見て、デメリントンが怒りながら手伝って、

安田

まあ、

湯野

シリリントンが、見守ってるの。

加藤

ちよつと、藍も働きなさいよ。

湯野

お前、見てるだけじゃん。

安田

で、

間

安田

で、

マリリンの机をみる

加藤

私、人のこと、手伝ってられないかも。

湯野

確かに、

加藤

私のデメリントンは、そんなタイプじゃないかも。

安田

なんで？

加藤

多分、多分だよ。このまま行くと、きつと、みんな大学を決めてくるじゃない。推薦だから。

湯野

絶対受かってくる！

安田

私も。

加藤

うん、すごいがんばってほしいよ。でもさ、そうするとき、きつと11月には2人とも、やったーってなつて、私はさ、まだ、年開けても勉強しなくちゃいけなくて、

湯野

そりゃ、国公立大学だからね、

加藤

わかってるよ、わかってるんだけど、…………、

湯野

私さ、なんで国公立大学に行くんだろう。

加藤

はっ？

湯野

なんでだろう？

安田

なに言ってるの？

湯野

ちよつとだけわかるような、

安田

うん、多分、湯野にはわかんないかも。

湯野

なんで、

安田

やりたいことがあって、大学に行くから。

湯野

…………、ないの？じゃあ、なんで行くの。

加藤

学費が安いから。

湯野

お金？

加藤

あとは、周りからの期待？

湯野

ちよつとまつてよ、それは、美咲の意思じゃないでしょ。

加藤

そうだよ、そうだけどさ、しょうがないじゃん。

湯野

何、そのしょうがないって。

加藤

私の国公立大学に行きますって感情はさ、周りか

ら見たらすごい良い感情なの。みんなに期待されて、がんばれがんばれって。でもさ、私は、デメリントンハサ、時計の中にしまおうとしてるんだよね。

なんで？

私だって、やりたいことあるよ。・・、演劇やりたいんだよね。だけど、

やれば良いじゃん。

そういうことじゃなくて、

その覚悟がないだけでしょ。

違う、覚悟じゃない。

あるだけいいよ。

えっ、

2人とも、やりたいこと、あるだけいいよ。私、ないもん。

・・・・・・。

湯野、がんばって大学行って声優やりなよ。美咲、

国立大学行って、多分、演劇サークルとかあるで

しょ。私、やりたいことないから。

カウンセラーになるんじゃないの？

なれると思う？私が。

・・・・・・。

自分のことも全然わかんないのに。人のこと、わかると思う？

・・・・・・。

多分、誰かのことみてないと、すぐ自分のこと考えちゃって、空っぽの自分に気づいちゃって、多分、シリリントンも、時計の中にしまうものなんてないんだと思う。だから、人のこと、見守ってるんだと思う。仕分けする感情がないんだもん。・・・・・・。

湯野、声優向いてるよ。才能ある。だって、湯野の声、元氣が出るもん。それで、同じ志を持った人たちと声優、目指してよ。美咲、勉強して国公立大学行きなよ。勉強できるじゃん。それも才能だよ。受かってからさ、演劇やれば良いじゃん。同じようにさ、勉強してきた仲間達と一緒にさ。同じ努力、してきた仲間とさ、演劇作れば良いじゃん。私さ、何にもすることないんだよね。大学行ってもさ、何していいかわかんないんだよね。

湯野
加藤

湯野
加藤

湯野
加藤

安田

湯・加

安田

湯・加

安田

加藤

安田

湯・加

安田

湯・加

安田

湯・加

安田

湯野

甘えんなよ。

加藤

自分で探せ。

安田

湯野はさ、試験実技なんですよ。

湯野

そうだよ。

安田

美咲はさ、点数取らなきゃ合格できないんですよ。

加藤

うん。

安田

私さ、小論文だけなんだよね。大学はさ、私の何を見て、合格させてくれるんだろう。私のどこを見て、カウンセラーに向いてるとか、判断してくれるんだろう。

加藤

自分でしょ。

湯野

美咲、

自分で決めるんですよ。人が決めるんじゃないですよ。自分でそう思わないと。

安田

自分の価値はさ、人が決めるんだよね。

湯野

もういいよ。

安田

なんで、

湯野

めんどくさい。やっぱり、本音とか聞こえちゃいけないんだわ。他人の音は、不快だわ。

安田

ごめん。

湯野

謝るものでもないから。それが、本音だから。私たちがちよつと、勘違いしてたのかもね。

加藤

そうかも。

湯野

よし、じゃあ、こうしよう。

加藤

何？

湯野

真ん中に大きな時計を描きます。その周りをコマ割りするから、そこに各々の時計とすりゃりんとんの絵を描いて来よう。で、後はさ、音符的なものを散りばめたらいいんじゃない。

安田

湯野、

加藤

ごめん、私ちよつと遅れるかも。

湯野

わかった。

加藤

締め切りまでには、間に合やすから。

湯野

うん。

加藤

先に、帰るわ。

湯野

ばいばい。

加藤

じゃあね、

加藤、荷物を持って出て行く。

安田

いや、私もさ、聞いてもらったから。うん。

湯野、入ってくる。

湯野

大変大変大変、

加藤

久しぶり。

湯野

久しぶり、ちょっと、早く描いてよ。締め切り近

いんだから。

加藤

ごめんごめん。うん、ちょっと余裕が出てきたか

ら、がんばるわ。

頼むよ、もう。

何が大変なの？

聞いてくれる？

うん。

私はね、来週、受験なわけですよ。

おっ、

わかった、希望の動機とか、なんで、声優になり

たいんですかとか、そういうので困ってんじゃない

いの。

バカなことを、そういうのは、モシャリントンが

考えて、マツコにもほめられたよ。

おお、

まあ、ありがと。

何が、

藍にも言ったんだけど、本音、聞いてくれて。

あつ、

ね。

聞いてもらってなかったら、止まってたかも、モ

シャリントン。

かもね。

うん。

で、何が大変なの。

そうそう、それがさ、受験の日に台風来そうなん

だって。

そういうえば、今週末、台風って、言ってたな。

だからさ、心配でさ、

そうだよね。

いや、じいちゃんがね。

えっ、

心配で、受験についてくるって言うからさ。

湯野

加藤

湯野

加藤

湯野

安田

湯野

加藤

安田

加藤

湯野

安田

加藤

湯野

加藤

湯野

加藤

湯野

加藤

安田

湯野

安田

湯野

安田

湯野

加藤

加藤 それは、大変だ。
もう、どうしよ。

湯野 幸せじゃん。

湯野 まあ、そうなんだけどね、

加藤 何、2人は、ここに来てたの？

湯野 私は、ちよくちよく。藍は、毎日来てたよね。
安田 うん。

加藤 毎日、すごいね。

安田 うん、なんか、ヒントないかなって思ってたさ、
加藤 ヒント？

安田 私、何がやりたいのになって。

加藤 あったの？

安田 ずっとさ、4人で描いてたじゃない。

湯野 マンガ？

安田 うん。で、その作品、昔のやつとか、全部見直しててさ、

加藤 だから、毎日来てたのか。

安田 そう。私、見てただけなのかなあって思ってたなら、
ちゃんと仕事してた。

何。

湯野 これ、

安田 写真？

加藤 うん、風景とか、描くときの、

安田 あっ、そういえば、

加藤 私の撮ってきた写真をコマにあわせてさ、切ったり、貼ったりして。

湯野 やってたね。

安田 私、写真好きだったんだなって思ってた。思い切ってカメラ買った。

加藤 ええ！

湯野 カメラマンにでもなるの。

安田 ううん、せっかく、心理学部行くんだから。

湯野 何？

安田 写真療法ってしてる？フォトセラピーっていうんだけど、

加藤 なんか、かっこいい。

安田 私、フォトセラピストになります。

湯野 いいじゃん。

安田 うん、ありがと、本音、聞いてくれて。私も、止まってた。

湯野 うん、
加藤 すくりんとん、様々だね。

間

湯野 やっぱり、本音は聞いてもらわないといけないんだろ
うね。
加藤 聞く方は、ちよつと大変だけどね。
安田 聞いてくれる人がいればね。
湯野 本当の音、本音か。

間

安田 これ、昔のやつ、マリリンが描いた。

絵を1枚、机の上にのせる

湯野 モシヤリントンじゃん。
加藤 デメリントンも。
安田 シリリントンもいる。
湯野 これ、マリリントン？
安田 多分。
加藤 なんだよ、自分だけかわいいじゃんか。
安田 うん、マリリンらしい。

間

湯野 聞けなかったね。
加藤 聞いてあげなかった。
安田 だから、マリリントン、止まっちゃってるのかも。
湯野 私たちも、止まりそうだったしね。
加藤 でも、もう1回動き始めたし。
安田 そのやり方も知ってるし。

間

湯野 どうする、聞きに行く？
加藤 すごい音しそうだよね。
安田 黒板、キーーーーーって、感じかな。
湯野 発泡スチロール、キューーーーーって感じだね。

加藤
安田

不快だな。
耳栓、持ってくる？

間

3人

でも、まあ、聞かせてもらいに行きますか。

間

湯野
加藤
安田

じゃなきゃ、マンガ甲子園、完成しないでしょ。
キャラクター描くやつがないからね。
悔しいけど、才能は認める。

間

加藤

リンダに、住所きいてくる。

安田

どうせ、家には、いるんでしょ。

湯野

どうせ、電話にもでないんだから、押し掛けるか。

加藤

いくでござす！

安田

いくぜよ！

湯野

ついでに、もう1回、私の音、マリリンに聞いて

もらう。

加藤

私も。

安田

私も。

湯野
3人

で、私たちの時計を、もう1回進めよう！
よし、ばっち来い！

終演